

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：24506

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12960

研究課題名（和文）アフリカ系アメリカ文学における階級・ジェンダーの表象

研究課題名（英文）Representations of Class and Gender in African American Literature

研究代表者

柳楽 有里（Nagira, Yuri）

兵庫県立大学・環境人間学部・准教授

研究者番号：40835253

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、アフリカ系アメリカ人による小説を対象として、黒人コミュニティ内部の階級的・ジェンダー的差別に注目し、20世紀のアメリカ黒人文学における階級・ジェンダーの表象の在り方が、どのように変遷したのかを明らかにすることを目的とした。本研究において取り上げた、ハーレム・ルネッサンス期の作品における登場人物たちの共通点として、白人社会の中で築き上げた階級や自分の理想に固執し、同胞たちと強固な連携を取れず苦悩する点が挙げられる。公民権運動後の作品においては、階級・ジェンダーにおける弱者たちがそれぞれ苦悩しながらも、そういった状況において生まれる孤独な者たちの心つながりにより重点が置かれていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

黒人作家の描いた階級を論じた先駆的研究はあるが部分的なものにとどまっている。米国社会における機会の不均等さを最も痛切に感じてきたのは明らかに黒人たちでありながら、階級に対する彼らの視点が注目されにくい。特に文学研究の文脈では、黒人のコミュニティ自体を分断させかねないため、階級およびジェンダーに関する視点はタブー視されやすい。とはいえ、先行する黒人作家を意識し彼らを模倣しつつも彼らとは違う黒人像を提示してきたアメリカ黒人文学が、アメリカ合衆国特有の問題をいかに乗り越えてきたのかという点について、マイノリティ同士での衝突の原因ともなりうる緊張関係に光をあてた点で本研究の意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：This study focused on class and gender discrimination within the black community in novels written by African Americans, and aimed to clarify how the representation of class and gender changed in 20th century black American literature. The protagonists in the works before and after the Harlem Renaissance were those who adhered to the class and ideals they had established in white society and suffered from the inability to forge strong alliances with their fellow citizens. In the post-Civil Rights Movement works, the focus was on the emotional connections formed by the loneliness experienced by those who are vulnerable due to their class and gender situations, even as they each suffer in their own unique ways.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アフリカ系アメリカ文学 人種 ジェンダー 階級 ハーレム・ルネッサンス

1. 研究開始当初の背景

アメリカでの差別や分断は、主として人種・ジェンダー・階級という三つの軸に沿っている。アメリカ文学研究でもこの三つの視座を兼ね備えるのが望ましい。黒人作家をとりまく環境では、人種闘争における政治戦略として一枚岩であることが優先されやすく、同じ人種の者たちを分断しかねない他の問題が不問とされやすい。現実には、ゾラ・ニール・ハーストンのような黒人女性作家が黒人コミュニティにおける男女差別を描いた場合など、黒人男性作家からは必ずしも歓迎されなかったという過去がある。本研究は、こうした風潮の中、貧しく搾取される黒人というステレオタイプに挑戦し、黒人コミュニティの密かな亀裂に注目した作家たちを取りあげる。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカ黒人作家たちが黒人コミュニティ内部の階級・ジェンダーの問題とどのように向き合ってきたのかという問いを核心とする。本研究で対象とする作品が書かれた時期は、大きく二つに分かれる。すなわち、黒人文学が大きく発展したハーレム・ルネッサンス期、および公民権運動以降から近年までの二つの時期である。これらの作品における黒人コミュニティの階級およびジェンダーどのように表象されているのかを分析する。最終的に、20世紀のアメリカ黒人文学における階級およびジェンダーの表象の在り方が、どのように変遷したのかを明らかにする。

3. 研究の方法

とりあげる作品群、個別の作品への解釈の主眼、また現地調査で収集する関連資料は以下の通りである。一年目は、19世紀を代表する黒人男性作家フレデリック・ダグラスと、ハーレム・ルネッサンス期の黒人女性作家たちは、黒人コミュニティからどのように影響を受けたのかを明らかにする。二年目以降は、公民権運動以降の黒人作家たちは、アメリカ社会における黒人であること、特に経済的に豊かな黒人であることをどのように描いてきたのかを明らかにする。

(1) フレデリック・ダグラスとハーレム・ルネッサンス期

黒人中流層の主人公を中心とした以下の作品を中心に分析する。

フレデリック・ダグラス：*The Heroic Slave* (1853)

ネラ・ラーセン：*Passing* (1929)

(2) 公民権運動以後

黒人中流層の登場人物を描く以下四つの作品を中心に調査・分析を進める。

ドロシー・ウェスト：*The Wedding* (1995)

トニ・モリスン：*Love* (2003)

ジェイムズ・ボールドウィン：*Giovanni's Room* (1956)

オクティヴィア・E・パトラー：*Kindred* (1979)

註) については、現地調査として、ハーバード大学図書館とイエール大学図書館に所蔵されているボールドウィンの戯曲 *Giovanni's Room* の草稿類を閲覧・調査した。

4. 研究成果

(1) フレデリック・ダグラスとハーレム・ルネッサンス期

マイノリティによる政治運動ではしばしば、同胞や後援者との葛藤が生じる。19世紀を代表する黒人知識人の一人であるフレデリック・ダグラスは、彼の自伝において妻アンナ・マレーについて殆ど触れることはなかった。本研究では、フレデリック・ダグラスの小説 *The Heroic Slave* (1853年) を取り上げ、本作品において、実在の人物マディソン・ワシントンを描くに至った動機を、ダグラス自身とマディソンを比較しながら考察した。ダグラスの持つ女性に対する密かな劣等感が、マディソンを称賛するに至った可能性を指摘した。つまり、小説の主人公マディソンこそが、ダグラスにとっての真の英雄であることを示した。本論考は、「The Heroic Image in Frederick Douglass's *The Heroic Slave*」というタイトルで、『関西アメリカ文学』第58号(2021年10月)に掲載された。

ネラ・ラーセンの *Passing* (1929年) は、批評家や研究者が特に熱心に論じている作品である。*Passing* は、中流階級の黒人女性で、白人としてパスしている白い肌の女性の物語として、簡単に要約できない豊かさを持っている。黒人として生きるアイリーン・レッドフィールドの夫、ブライアン・レッドフィールドが、白人になりすましたクレア・ケンドリーに好意を抱く *Passing* は、不倫というもうひとつのテーマと融合する。人種的なテーマは男女関係という普遍的な三角関係の問題と結びついており、家庭内の安定が脅かされることを恐れる主人公アイリーンの心理を通して、*Passing* は階級の問題も取り上げている。不倫の問題は、作家ネラ・ラーセンにとって人種の問題と同じくらい切実なものだった。ラーセンの夫が白人女性と不倫関係にあった

ことは、当事者たちの周囲ではある程度認識されていたことであり、*Passing* の三角関係はラーセン自身の体験と深く関係しているようにも読める。白人としてパスするという主題の政治的重要性はもちろん否定できないが、*Passing* におけるラーセンの作家としての意図はそれだけにとどまらない。*Passing* が主人公アイリーンの内面や彼女に起こった重要な出来事をあえて明かさないうことに注目し、最終的には、経済的豊かさを失うことへのラーセンの恐怖がアイリーンに投影されていることを論じた。本論考は、「Race and Class in Nella Larsen's *Passing*: A Window to the Other Side」というタイトルで、『黒人研究』第92号（2023年3月）に掲載された。

(2) 公民権運動以降

本研究では米国における差別を固定的なアイデンティティではなく、より流動的な条件に基づいて理解することを目指す。人種的観点における混血児、ジェンダー的観点におけるLGBTなど、単純な二項対立ではとらえきれない多様なアイデンティティがありうる。そして階級は、人種やジェンダーにもまして、変動しやすい属性である。本研究で取りあげるラーセンの*Passing* に描かれる混血の女性たちは、黒人の血が入っていることを恥じるというより、豊かな生活を望んでいるが故に白人に成りすましている。つまり、人種的な越境は、階級的な上昇を目的としたものであり、これを表面的に人種的観点のみでとらえるのは限界がある。従って本研究では、二年目以降は、ハーレム・ルネッサンス以後も長く活動をつづけたウェスト、フランスに移住後も成功した黒人登場人物を描いたポールドウィン、裕福な黒人家庭を描いたモリスンに注目する。特に、ノーベル文学賞を受賞し国外的にも注目度が高まったモリスンは、アメリカにおける黒人の姿の多様性を常に意識してきた作家である。

ドロシー・ウェストは、ハーレム・ルネッサンス期以降、長きにわたり執筆活動を続けた作家である。彼女の集大成として発表された *The Wedding* (1995年) を取り上げる目的は、本作品を人種と階級という2つの差別的カテゴリーから分析することである。現代の批評家たちは、ウェストの人種と階級に関する視点は時代遅れであり、本質主義的であると指摘してきた。しかし、主に二人の主要女性登場人物(グラムとシェルビー)の語りを通して、ウェストが人種と階級の両方を、揺らぎやすく信頼できないものとして表現している点に注目した。そして、その過程で、このテキストが、アイデンティティを模索しながら黒人として生きようとする次世代を前景化していることを示した。また、*The Wedding* の前身である未完の “Where the Wild Grape Grows” と比較することで、*The Wedding* の悲劇的な結末(罪のない少女の死)を通して、愛が人種と階級の壁を乗り越えることができるものとして提示されている点を指摘した。本論考は「20世紀アメリカ文学のローカル・カラー：ドロシー・ウェストの *The Wedding* における壁を乗り越える愛」というタイトルで日本アメリカ文学学会関西支部若手シンポジウム(2022年1月)にて口頭発表を行い、その後「Reaching Out a Hand in Dorothy West's *The Wedding*」というタイトルで、『兵庫県立大学環境人間学部』第25号(2023年3月)に掲載された。

トニ・モリスンの『ラブ』(2003年)は、コーギー家の家父長であるビルを頂点とするコーギーズ&リゾート、そしてそれを核として形成された黒人コミュニティを描いている。しかし、一見豊かで輝かしいこの「家」には資本主義と家父長制が浸透しており、コーギー以外の女性たちも容易にはそうした価値観から逃れられず、そのために彼女らの絆は切り裂かれ、長いあいだ憎みあっている。端的に、『ラブ』は、黒人コミュニティを捕えている家父長制や資本主義の有害なイデオロギーを乗り越えようとするテキストであると結論付けられる。「ビル・コーギーとはどんな人間であったのか?」という問いに対するひとつの長い答えが、『ラブ』という小説である。言い換えれば、結末部分におけるビルの墓に刻まれた墓碑銘こそ、『ラブ』という作品そのものを比喩的に表している。つまり、その墓碑銘を娼婦であるセレスティアルは隠し、彼女の発する声と同調して長年コーギーズ&リゾートで働いてきたLもハミングをはじめ。この段階で「ビル・コーギーとはどんな人間であったのか?」という問いがすっかり無意味なものとなっていることを示している。ビルの死後、ビルについての言葉が延々と続いていくが、そうした言葉がいつしか女性たちの発する言葉ばかりとなって、テキストに君臨していた富裕な家父長ビルの地位が掘り崩されている点を指摘した。本論考は「トニ・モリスンの『ラブ』における法を超えた愛」というタイトルで脱稿済みである。

『ジョバンニの部屋』は、ジェームズ・ポールドウィンが1956年に発表した小説である。作品の主人公は、作者ポールドウィンと同様にフランスで暮らすアメリカ人青年デイヴィッドであり、物語はおもに、彼と美しい青年ジョバンニとの同性愛を描きだしている。いまだに刊行されていないものの、ポールドウィン自身がこの小説を戯曲として書き直したタイプ原稿が残っている。(ハーバード大学図書館とイエール大学図書館の現地調査で収集したタイプ原稿と書簡に基づいている。)本研究では、『ジョバンニの部屋』の戯曲版と小説版を比較するのみならず、ポールドウィンの1964年のエッセイ “Why I Stopped Hating Shakespeare” と、このエッセイで引用されるウィリアム・シェイクスピアの *The Tragedy of Julius Caesar* にも注目した。フランスで暮らすことでシェイクスピアと和解したポールドウィンは、みずからの小説『ジョバンニの部屋』を戯曲として書き直す際、シェイクスピアの英語に隠された “bawdiness” を受けつぐことを考えていた。本心をさらけだして、世の中と闘うべきか否かを迷うハムレットの台詞を引用したポールドウィンは、自分自身のホモセクシャルな欲望を認めようとしないうデイヴィッドを通じて、嘘のなかで生きているアメリカの白人たちを批判したのだと考えられる。ポールドウィンにとって、セクシュアリティと人種という二つのテーマは、常に結びついており、ゆえに、主

要登場人物が白人ばかりの『ジョバンニの部屋』もまた、人種に対するボードウィンの問題意識を反映していて、そのことが、ボードウィンとシェイクスピアの関係から見えてくる。本論考は「シェイクスピアへの羨望—ジェームズ・ボードウィンの戯曲版『ジョバンニの部屋』について」というタイトルで日本アメリカ文学会関西支部6月例会(2024年6月)にて口頭発表を行なった。

オクテイヴィア・E・パトラーの『キンドレッド』(1979)は、黒人女性ダイナ・フランクリンのタイムスリップを描いた小説である。1976年のアメリカに住むダイナは、南北戦争以前の南部へのタイムスリップを繰り返し、結末では左腕を失う。先行研究では、パトラー作品における身体の重要性がしばしば議論されてきた。しかし、本作品でダイナが喪失する腕がなぜ左腕なのかは、十分に解明されていない。本研究では、男性が主流であった1970年代のSF作家たちの中で、数少ない女性作家として頭角を表していたアーシュラ・K・ル＝グウィンの代表作である『闇の左手』(1969)と、マイノリティである黒人作家の中でほとんど唯一成功した黒人女性作家であったパトラーの『キンドレッド』との関連性を検証した。パトラーが『キンドレッド』において描き出したのは、血縁関係にとらわれない、お互いに孤独な者たちのあいだの「同族」関係という、相互依存の関係にあるもの同士のつながりである。この「同族」的絆というテーマを、パトラーはル＝グウィンから受け継いだといえる。また、『キンドレッド』のダイナが左腕を失うのはパトラーがル＝グウィンの代表作『闇の左手』を意識していたと考えられる。『闇の左手』において、ゲセレンが左腕をつかまれ、雪の「壁」に飛びこんで左腕を失うという展開は、『キンドレッド』のクライマックスと驚くほどよく似ている。『闇の左手』からの影響を考慮に入れると、ダイナの左腕の喪失は、過去の苦々しい経験を示すのと同時に、左腕の喪失が明るい未来への希望を残すための喪失でもある可能性を読みとることができる。『キンドレッド』は、パトラーのいう同族的な絆で結ばれた寄る辺ない者たちが、相補関係の上に成り立つ調和のとれた明るい未来へ向かうことを示している点を指摘した。本論考は「寄る辺ない者たちの連帯『キンドレッド』と『闇の左手』との絆を中心に」というタイトルで黒人研究学会1月例会(2024年1月)にて口頭発表を行い、その後「オクテイヴィア・E・パトラーの『キンドレッド』における過去と未来の相補性」というタイトルで、『兵庫県立大学環境人間学部』第26号(2024年3月)に掲載された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柳楽有里	4. 巻 26
2. 論文標題 オクテイヴィア・E・バトラーの『キンドレッド』における 過去と未来の相補性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 兵庫県立大学環境人間学部研究報告	6. 最初と最後の頁 169-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳楽有里	4. 巻 92
2. 論文標題 Race and Class in Nella Larsen's Passing: A Window to the Other Side	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 黒人研究	6. 最初と最後の頁 28-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳楽有里	4. 巻 25
2. 論文標題 Reaching Out a Hand in Dorothy West 's The Wedding	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 兵庫県立大学環境人間学部研究報告	6. 最初と最後の頁 103-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳楽有里	4. 巻 58
2. 論文標題 The Heroic Image in Frederick Douglass's Slave	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西アメリカ文学	6. 最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柳楽有里
2. 発表標題 シェイクスピアへの羨望 ジェイムズ・ボールドウィンの戯曲版『ジョバンニの部屋』について
3. 学会等名 日本アメリカ文学会関西支部 6月例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 柳楽有里
2. 発表標題 寄る辺ない者たちの連帯 『キンドレッド』と『闇の左手』との絆を中心に
3. 学会等名 黒人研究学会 1月例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 柳楽有里
2. 発表標題 ドロシー・ウェストのThe Weddingにおける壁を乗り越える愛
3. 学会等名 日本アメリカ文学会関西支部
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------